

資料
第Ⅱ部第1章

Yの葛藤場面と克服過程 (39 事例)

※筆者はR、事例はJと省略

J-1

タイトルー社会的微笑

2003年3月19日 (1ヶ月)

(背景)

誕生後間もないときは、生理的微笑のような笑いであったが、生後1ヶ月になると相手の行動を見ながら笑うようになる。

(エピソード)

Yは、誕生後間もない時には決して笑わず固い表情をしていた。時に笑うこともあったが、それは生理的微笑というものであり、本来の笑いとは異なる。Yは、生後1ヶ月頃になると養育者やRが舌を出す姿を見て笑ったり、養育者やRが手を振るとその手の動きを見ながら笑う姿が度々みられた。

(考察)

この時期は、生理的微笑ではなく、本来私たちが笑うような笑いに近づく。声を出しながらケラケラという笑いではないが、養育者やRの行動を受け止め笑うなど、人へのかかわりがみられるようになった。

J-2

タイトルー首がすわる

2003年5月19日 (3ヶ月)

(背景)

Yは、だんだんと首がすわるようになる

(エピソード)

誕生して数ヶ月の子どもは、首がすわっていないので抱くときに注意しなければならない。Rは、首がすわっていないYを抱くことが怖く、この頃は祖母にYを抱いてもらっていた。Yは、時に抱いてもらいたいようで「ウ～ウ～」などと言う。RはYを抱きたいが、首がすわっていないRを抱くことは怖い。Rは、Yが「ウ～ウ～」と言ったときには祖母に声をかけた。Yは、祖母に抱かれると安心した表情を浮かべながら祖母やRを見てニコニコ笑う。この頃、Yは辺りにも興味関心を持ち始めたようで周囲をキョロキョロ見ている。

(考察)

この時期は、人とかかわりを持ちたいということ「ウ～ウ～」という言葉を用いて表現している。Yは、現段階においては「ウ～ウ～」という言葉を用いて養育者やRに抱っこしてほしいことを訴えているが、やがては言葉を獲得するなかで「だっこしてほしい」と表出するようになるだろう。

J-3

タイトル物の選択「どっちが欲しい？」

2004年1月20日（11ヶ月）

（背景）

Yは、だんだんと指さしをするようになってきた。初めは、自分が不思議なものに対して指をさしていたが、その後自分が要求するときに指さしを用いるようになる。

（エピソード）

Yは、10ヶ月頃から指差しが始まる。11ヶ月頃になると何かブツブツ言いながら指さしを始める。その頃、母親がイスに付いているテーブルの上にボーロと麦茶を並べる。母親は、Yに向かって「どっちが欲しい？」と尋ねると、Yは麦茶を指差す。徐々にYは自分が欲しい物に指を差すようになり、周りの者がうどんを食べているときには、Yはそのうどんを指差す姿もみられた。

（考察）

指さしは、自分の要求を相手に示す方法として重要な行動であり、発達過程のなかで大切な位置づけとなっている。この時期のYは、母親から二者択一の質問をされ、その質問に対して指さしを用いながら応答している。その後、言葉を獲得するようになると言葉を用いて自分の要求を相手に伝えるようになると思うが、この時期のYはその状況までには至っていない。

J-4

タイトル母親との再会「Y、ママが帰って来たかもよ」

2004年4月10日（Yは13ヶ月）

（背景）

母親は、実の母親（Yの祖母）が手術をしなければならなかったため、10日間実家へ戻っていた。その間Yは、父親と一緒に父方の祖父母の家で過ごす。Yは、母親がいなくて寂しいという気持ちを言葉で訴えたり、泣いたり、ぐずったりする様子もなく過ごしていた。10日が経過し、母親と再会する日の様子である。

（エピソード）

Yは、父方の実家で過ごしている間、父親、祖父母、R（伯母）、父親の妹（叔母）などと生活をしてきたが、家族に向かって「ママ」というようなことは一度もなかった。それだけに家族は、Yの日々の様子を事細かに見ながら、Yとのかかわりを大切にしていた。

当日、父親の車に乗って母親が帰宅したのは午後9時過ぎだった。Yはお風呂に入り、パジャマ姿でソファの上で眠そうにコロコロしている。Rは、Yの姿から眠いことを理解することができた。そのとき、車の音が聞こえた。Rは、「Y、ママが帰って来たかもよ」と言うと、眠そうだったYは玄関まで走って行く。Yは玄関に立ち、母親が玄関に入って来るのを心待ちにしている。Yは、母親が玄関の扉を開け中へ入ってくると母親に抱きついた。

その後、Y は母親に抱かれながらリビングのイスに座る。Y は、時々母親の方に振り返り、一人で笑っては大はしゃぎした。

(考察)

この事例の前日に母親から R 宛てにメールが届いた。メールの内容は、Y が自分（母親）を覚えてくれているか心配だという内容だった。しかし当日、Y は眠そうにしていたのにもかかわらず、母親が帰宅したことが分かると真っ先に玄関へ走り、母親が玄関の扉を開けて入ってくるのを待っていた。Y は、母親と 10 日振りの再会であったが、言葉ではなく表情で自分の気持ちを表している。特にリビングで母親に抱かれながら時に後ろを向いて母親の顔を確認するあたりは、母親の帰宅の喜びを言葉以上で表現しているように思われる。

J-5

タイトル「あっち行って、邪魔」

2005 年 2 月 3 日（1 歳 11 ヶ月）

(背景)

この時期、Y は言葉が発達することにより自分の気持ちを相手に直接的に訴えるようになった。しかし、言葉が発達してきたとはいえ、まだまだ自分の気持ちのすべてを言葉で表すことは難しい時期である。

(エピソード)

この時期、Y は近くにある物を「それ」と言ったり、遠くある物を「あれ」と言ったりするようになる。Y は、母親と会話をしながら分からないことがあると、「これは？」と言ったり、「あれなに？」と尋ねたりする姿もみられるようになった。この日は、Y が遊んでいるときに母親がその場にいることで Y の遊びの妨げになったようであった。Y は、「あっち行って、じゃま」、「むこうにいて、じゃま」などと言う。

(考察)

Y は、直接的な方法を用いながら自らの要求を通そうとしている。Y は、自分だけでその場にいたいにもかかわらず母親がその場にいるということは、自分の要求とは異なる。そのため、Y は自分の思いと相手の要求が一致しないことから、自分の要求を通すために相手に向かって拒否的な方法を用いて直接的な言葉で伝えている。この Y の言葉は、自己中心的な言葉の表出であり、自分の思いを相手に直接的に伝えている。

J-6

タイトル「Y は、ママにだっこしてもらいたいんだよな～」

2006 年 6 月 27 日（2 歳 4 ヶ月）

(背景)

この日は、母方の祖母の告別式だった。Y も式に参列したが、その後お見送りをした後、R とパートナーと 3 人で父方の実家に戻る。夕方、Y の母親以外は告別式から帰宅しリビングで Y と一緒にいたときの出来事である。

(エピソード)

この日は、母方祖母の告別式だった。この間、母親は祖母の看病に行っていたため、Yは父親と共に父方の実家で生活していた。Yは、告別式で久しぶりに母親に会う。Yは、母親に会った途端抱きつくが、お経が始まって間もなく、Yは「ねえね、ねえね」と言う。RはYを抱き、控え室にいた。葬儀が終わり、Rとパートナーが先にYを車に乗せ父方の祖父母の家に帰宅する。

夕方、何気なく家族の写真を見ていると、Yは「Yは、ママにだっこしてもらいたいんだよな～」とポツリと言った。Yの周りには、祖父母をはじめ、父親、Rたち夫婦と叔母夫婦も集まっていた。家族全員が、Yの言葉を聞いて驚いた。Rは、Yが母親を求めてさらに悲しまないようにYを遊びに誘った。

(考察)

Yは、母親に甘えたい、でも甘えてはいけないという状況をYなりに理解していたのだろう。だからこそ、Yは家族に向かって母親に会いたいという言葉を一言も発しなかった。しかし、この時期はYにとって限界の域を超えていたのかもしれない。だからこそ、Yは「Yは、ママにだっこしてもらいたいんだよな～」と発したのだろう。このYの発言状況は、家族に自分の気持ちを伝えたいというよりは、Yの気持ちのつぶやきがポツリと表れたように思える。

J-7

タイトル「ねえね～だっこ」

2005年6月29日(2歳4ヶ月)

(背景)

この日は、Yがしばらく振りに母親に会うため父親と車で母親の実家へ行く日である。父親は、Yを父方の実家から車に乗せて出かけようとするときの出来事である。

(背景)

Yは、Rと一緒に遊んでいると、父親が車で迎えに来る。父親は、「Y、これからママの所へ行こう」と話す。Rが車の所までYの手を引き連れて行く。父親が、Yを車に乗せようするとYは「ねえね～だっこ」と言うのでRがYを抱っこをするとYはRから離れない。父親は、少し困った様子で「Y、ママに会えるよ～」と言うが、Yは首でイヤイヤをしながら「(ねえねと遊べなくなるから)さみしい～」と話す。父親をはじめ、Rと祖母は、Yを車に乗せようと心の中では葛藤している。同時にYも車に乗りたくないためにRに抱き着いている。

少しした後、Rは「Y、また帰ってきたらねえねとたくさん遊ぼう」と話すと、首を横に振り、足をバタバタしていたYが一瞬うなずいたため、Rは今だという思いから父親に目で合図し、Yを車に乗せて欲しいことを訴える。それに気づいた父親はYを抱き、チャイルドシートに乗せ母方の実家へと向かった。

(考察)

Y は、母親に会いたいという気持ちはあったように思える。なぜならば、朝から続けていた遊びを中断し、母方の実家へ行こうということについては Y 自身も納得していたからである。しかし、それは R も一緒に車に乗って行って欲しいという Y の思いがあったようにも感じられる。R が、Y を納得するまでには時間はかかったが、R の話も理解できたのか、Y は R の言葉にうなずいた。Y は、R との信頼関係もできていたからこそ、R の気持ちを受け止め、理解することができたのである。

J-8

タイトル「アブアブになったらこれのむの」

2005年10月14日（2歳7ヶ月）

（背景）

このエピソードは、Y の弟 K が生まれる前の Y の内面の姿を記録したものである。Y は、特に弟 K の誕生を知ると弟の存在を否定することもなかったが、この頃になると今までには見られないような姿で周りに甘える Y の姿をみることができた。

（エピソード）

Y は、両親、伯母夫婦、伯母夫婦の7名で近くのお好み焼き屋へ行く。しばらくすると、Y はマヨネーズのビンを手で持つ。Y は、マヨネーズのビンを哺乳瓶に見立てながら「アブアブになったらこれのむの」と話す。R が、「Y、お兄ちゃんになるんでしょう？」と尋ねると、Y は「う～ん」と首を横に振りながら Y は「アブアブになるの」と答えた。

（考察）

Y は、両親から弟ができるという話を聞いたときには嬉しかったように思えた。それは、R や家族に会うと「Y、おにいちゃんになるの」などと Y が言葉を発していたからである。しかし、だんだんと母親のお腹が大きくなったり、部屋に新生児の用意がされるようになると今までの環境とは異なることを Y なりに理解しはじめたように思える。この時期の Y は、先の見通しが少しずつできるようになってきた時期なのだろう。Y は、弟が誕生して欲しくないという気持ちを直接的に言うことができないため、お好み焼き屋では Y がマヨネーズを哺乳瓶代わりにし赤ちゃん返りの行動を取ったり、Y の発する言葉も赤ちゃん言葉を用いるなど間接的に自分の気持ちを相手に伝えている場面である。

J-9

タイトル「つかれた」

2005年11月30日（2歳9ヶ月）

（背景）

Y は、午前中から R の家で遊んでいる。R が、お昼時になったので昼食を準備し、Y にお昼ご飯を食べるように言葉がけする。

（エピソード）

Y は、R の家のリビングでミニカーを走らせながら遊んでいる。R は、キッチンでお昼ご飯を作ると「Y、お昼ご飯食べるよ～」と言う。Y は、R の言葉を聞くと「つかれた」と言

いりビングに寝転ぶ。Yの姿を見たRは、「あら？今までミニカーで遊んでいたでしょう。まだミニカーで遊びたいの？」と尋ねるとYはうなずく。

(考察)

Yが、ミニカーでもっと遊びたいことをRに言えないために「つかれた」という言葉を用いている。ここでは、間接的な表現を用いていることを理解している者であれば、Yがミニカーで遊び続けたいことを理解しやすい。

J-10

タイトル「Yんち(家)におねがいしま〜す」

2006年5月12日(3歳2ヶ月)

(背景)

対象児Yの幼稚園入園直前に弟Kが誕生したことにより、Yの家族は約一ヶ月間父親方の祖父母の家で過ごした。この事例は、母の日参観の帰りの出来事であり、久しぶりに両親と3人でいられる時間だった。エピソードは、Yと両親が父親の車に乗り、祖父母の家に戻ろうとしているときのYの発言である。

(エピソード)

母の日参観が終わるとYと母親は、父親が迎えに来た車に乗る。母親が父親に参観の様子を話していると、Yは「Yんち(家)におねがいしま〜す」と急に言う。父親が「はい、わかりました」と応えると、Yは「あかいハンドルをもっていこう〜」と言う。父親は、「あれ？赤いハンドルはどうしたっけ？」と尋ねると、Yは「ばあばんち」と答える。父親は、「ばあばんちだよ」とYに確認しながら言うと、Yは「うん、ばあばんちにあかいハンドルをとりについて、Yんちにいこうよ。Yんちに」と言う。父親は、「Yんちに行くんだ、もう？」と尋ねると、Yは「Yんちはレンガで、おおかみがどんってきてもこわれないでしょう」と言う。父親は、「そうだね。おおかみが来ても壊れないね」とYの考えに同意する。Yは、「Yんちのレンガのおうち」と話しが続くが、再び母親が先ほど話していた母の日参観の話をはじめた。

(考察)

エピソードは、Yの気持ちを様々に読み取れる。まず、Yは単に自分の家に帰りたかったのかもしれない。この場合は、直接的な方法を用いていることになる。次に、この時期は弟の誕生により両親が弟の方にも目を向けているためKに対する「やきもち」が芽生え、弟のいる祖父母の家ではなく、自分の家に3人で帰ろうと発言しているとも考えられる。この場合には、間接的な方法を用いている。さらに、この時期は現実とファンタジーの世界を「行きつ戻りつ」することができるのでレンガの家などという表現を用いながら自分の気持ちを間接的に表しているとも考えられる。しかし、Yのこれまでの姿を見てみると、2歳7ヶ月の時に赤ちゃん返りをしたという事実もある。このエピソードは、様々な解釈をすることができるが、Yが赤ちゃん返りをしたという事実からも弟への「やきもち」から「Yんちはレンガで・・・」などという言葉を使用し、両親と一緒にいたい気持ちを間接

的に示しているようにも考えられる。

J-11

タイトル 「ねえね、きらい！ねえねのバカ！」

2006年7月22日（土）（3歳5ヶ月）

（背景）

Rは、祖父母宅でYと遊ぶ。この頃、Yは相手が自分の物を取ってしまうと誰かに助けを求めたり、自分の物を取られそうになると言葉によって相手を批判するような態度も見られるようになってきた。以下のエピソードは、そのような場面の一例である。

（エピソード）

Yは、カブトムシ4匹を虫かごの中に入れていた。それを見たRは、「ねえねに一つくれる？」とYに言うと、Yは怒り、「ねえねは、金魚をもっているでしょう。ねえねにあげない。ねえね、きらい！ねえねのバカ！」などと強い口調で言う。これ以降、YはRに対して批判的な態度が続く。父親は、Yが今までRのことが大好きだったのにも関わらず、最近のYがRに対する態度があまりにもひどいので、謝ったことがあった。ただRとしては、Yの中の何かが発達しているのだと考えていた。

（考察）

Yが持っていたカブトムシを見たRが、「一つ（カブトムシ）くれる？」と話すと、Yは「ねえねは、金魚をもっているでしょう。」と提案する。Yの主張は、Rが金魚を飼っているのだからカブトムシはいらないでしょうという意図が含まれている。その後、YはRをまったく受け入れようとしない。父親は、YのRに対する態度を見るとRに誤る。しかしRとしては、Yの内面の何かが発達しているのだと考えていた。Yにとってカブトムシは、自分のものであり、他の人には渡したくないという拒否感を示している。自分に対しては相手が入り込まないようにバリアを貼り、Rに対しては葛藤を示す。上手く相手に伝えることができないため、先に述べたような言葉を発する。この場合は、相手に非があるように示し、外に対しては攻撃的とみえるだろう。しかし、内側には内的葛藤を示している。一般にこの時期は、自我の拡大と呼べるものである。このエピソードで本当に葛藤しているのはY自身であることを理解することができる。

J-12

タイトル 「Kは小さいからだめだよ」

2006年8月5日（3歳5ヶ月）

（背景）

YとRが祖父母の家で東京ディズニーランド（以下TDLと略記）の話始める。Yがあまりにもいたづらをするため、日をおいてからRは弟Kと一緒にTDLへ行く提案をする。

（エピソード）

YとRは、祖父母の家でディズニーランドの予定を考えている。Rは、「いつ、ミッキーさんのところに行こうか？」とYに尋ねると、Yは「いまからいこうよ～」と言う。Rは、

「今日は、ミッキーさん寝ているから行けないの」と答えると、Yは「ひるまなのに？」ととても不思議そうに話した。

さらに、Yの弟への気持ちの実際を知りたくて、Rは「じゃあ、今度K（弟）と一緒にディズニーランドへ行こう」と言うと、Yは「Kは小さいからだめだよ」と話す。Rは、途中で自分の家に戻るが、Rが帰った後もYは祖父母に、「ねえねが、Kをディズニーランドへつれていくっていつている。まだKは小さいからだめなのにな」と言い続けていたそうである。

（考察）

Rが、Yに「いつ、ディズニーランドへ行こうか？」と尋ねた時に、Yが「いまからいこうよ～」と答えた場面は、YがTDLへ行きたいという強い気持ちの表れである。Rは、Yの返答に対して「今日は、ミッキーさん寝ているから行けないの」と話すと、Yは不思議そうな表情を浮かべる。これは、YがRの今すぐ行けない理由について本当なのか？それともウソなのか？と考えている様子とも捉えることができる。

また、RはYの本意を知りたいと思い、その場でKと一緒にTDLに行こうと提案してみると、Kはまだ小さいから無理だと言い続ける。Yが言うように、Kはまだ小さいためにディズニーランドへ行ってもYのように走り回りながら遊ぶことは難しいと思っているのかもしれない。しかし一方、毎年一年に一度、YはR夫婦と3人でディズニーランドは行っている。その経験からも楽しさを実感しているYは、Kにその楽しさを奪われたくないという気持ちの表れもあるのではないだろうか。

J-13

タイトル 「ディズニーランドのひだけは、ねえねのおうちにおとまりする」

2006.8.8（3歳5ヶ月）

（背景）

Yから電話がくる。Rは、Yに家に泊まってくれるかどうかを尋ねる。Rの質問に対してYは、自分の都合の良いような返事をする。

（エピソード）

Yから電話がくる。Rは、「Y、ねえねのお家に泊まってくれる？」と尋ねると、Yは「やだ、Yのおうちでねる」と答えた。Rは、Yが困るような質問をとして「じゃあ～、ディズニーランドに行けないな～。ディズニーランドに行く日は、夜が遅いからねえねのおうちに泊まるんだけどな～」と言うと、Yは「ディズニーランドのひだけは、ねえねのおうちにおとまりする」と話した。

（考察）

以前のYは、Rが「泊まってくれる？」と尋ねると、「うん、いいよ。おとまりする」というようなYの応答が返ってきていたが、この時期になると自分の家について意識し始めるようになってきた。エピソードでは、初め泊まることはできないと主張していたYであるが、「ディズニーランドのひだけは、ねえねのおうちにおとまりする」と限定した応答を

示している Y の姿がみられた。

J-14

タイトル「きょうは、Y もたのしかった～」

2006年9月13日（3歳6ヶ月）

（背景）

Y が祖父母の家に遊びに行くとおば（伯母=R・叔母）二人がいる。その頃、幼稚園では運動会の練習があり、その姿は遊びの中でもみられた。Y は家の中で走るポーズをとったり、家の中を走り回ったり、「よ～いどん」と言葉を発しながら遊んでいる。

（エピソード）

この頃、幼稚園では運動会の練習をしているようである。Y は、「KI（叔母）ちゃん、ピ～ってやって」、「ねえね（伯母=R）、こうやって準備して」などと言う。Y のかけっこポーズは、右手と右足が同時に出る。Y は、おば（伯母・叔母）二人に向かってかけっこについての説明をした後、かけっこをする。

その結果、R が一番になり Y は涙を流した。おば（伯母・叔母）二人は、「Y がボールをとっていたから、ねえね（R）が速く走ったんだよ」と話した後、R が Y を抱いた。しばらくの間、Y は R に抱かれたままだった。帰宅後、「きょうは、Y もたのしかった～」と母親に話した。

（考察）

Y がおば（伯母・叔母）二人とかけっこをすると R に負ける。おそらく Y は、このときも自分が一番にゴールに入れると思っていたにちがいない。Y は、家族の中では優位でいられることを自身も理解しているように思えた。だからこそ、かけっこのときにゴールに向かって走るのではなく、ボールをとる行動をしたのだとも考えられる。Y は、家族が自分を一番にしてくれると考えていたのだろう。Y は、負けたという悔しさから涙を流すにもかかわらず、帰宅後「きょうは、Y もたのしかった～」と言った意味は、対等に扱われたことへの嬉しさからではないかと読み取れた。

J-15

タイトル「Y の勝ち！」

2006年10月8日（3歳7ヶ月）

（背景）

Y は、運動会を境に競争のような遊びが好きになってきた。Y は、遊びをするなかでいつも勝ち負けを考えるようになった。

（エピソード）

Y は、この日初めての運動会を迎える。運動会の経験を通して、Y は日常生活のなかでも勝ち負けを判断するようになる。運動会を終えたこの日は、R と一緒にお風呂に入った。湯船から出た R と Y はパジャマを着る。Y は、パジャマを着るときになるといつも R に負けていたことからこの日は急いでパジャマに着替えると「Y の勝ち！」と話した。

(考察)

Y は、運動会を経験することにより勝ち負けを生活のなかでも言うようになった。特に勝ち負けを通して、他者と比較する Y の姿がみられるようになった。前エピソードでは、Y が R に負けたが、おば（伯母・叔母）たちが Y を対等に扱ったことを理解できたことにより自分の気持ちを調整している。本エピソードは、R よりも速くパジャマを着ることができた喜びから自分の気持ちを調整している Y の姿がみられた。

J-16

タイトル 「ねえねのいえにすむ」

2007.1.21 (3 歳 11 ヶ月)

(背景)

R は、Y が家に遊びに来た時に Y の部屋があることを伝えると、家に戻った際に両親に話した。また数日後、両親に注意された Y は「ねえねのいえにすむ」と言いながら家を飛び出した。

(エピソード)

2007.1.21 (3 歳 11 ヶ月)

両親に怒られた Y は、「ねえねのいえにすむ」と言い、コートも着ないで玄関を出て門のジャバラを開けた。母親が Y を追いかけて、「パパが泣いちゃうよ！」と話したが、Y は母親の言葉を聞き入れなかった。

(考察)

Y は、両親に怒られたことについての不満を言葉で解決することが難しかったのだろう。そのため、Y はその場から逃げるといった行動を取ったと考えることができる。おそらく、Y 自身が両親に注意されたことを納得していないことから母親の言葉がけに対して否定し、聞き入れなかったのだろう。このときの Y は、その場から逃げるといった自分の身を置きたいということから「ねえねのいえにすむ」という言葉を発したようにも思われる。

J-17

タイトル 「Y、ねえねの家に住んでくれるんでしょう？」

2007.2.9 (3 歳 11 ヶ月)

(背景)

Y は、R の家に遊びに来る。R は、Y に向かって R の家に住んでくれるかどうかを尋ねると Y はなかなか応答しない。

(エピソード)

Y が、R の家に遊びに来る。R は、「Y、ねえねの家に住んでくれるんでしょう？」と尋ねると、Y は「うん？」と少しとぼけた返事をする。R は、もう一度「Y、ねえねの家に住んでくれるんでしょう？」と尋ねるが Y は黙っている。R は、「だめ？」と優しい口調で話すと、Y は答えにくそうな表情をしながら小さな声で「うん」と答える。R は、「どうして？」と尋ねると、Y は「だって、ようちえんがあるから」と答える。R は、「ねえねの家から幼

稚園に通えば？」と提案すると、Yは「バスにのれない」と心配そうに答えた。Rは、「ねえねの家の近くをバスが通るから大丈夫よ！」と話す、YはRの言葉がけに応答せず、ぼっ～としている。

(考察)

Yは、Rの質問に対して答えないという対応方法を取っている。それは、Yが保育者の提案に否定的であるからである。この方法は、直接的表現であるが相手に向かって言葉を発するよりも相手を傷つけない方法とも考えられる。

J-18

タイトル「Y、おなかがすいた」

2007.2.12 (3歳11ヶ月)

(背景)

Yが祖父母の家で遊んでいると夕方父親が迎えに来た。Rは、父親が来る少し前に祖父母の家に着いた。

(エピソード)

夕方、Rは実家へ行くとYに会う。父親が、少しすると迎えに来るが帰りたがらない。そのため、Rが家に帰る時にYを家まで送ることにした。しばらくリビングで遊び、そろそろRが帰ろうとすると、YはRに抱きつく。そして、Yは急に「Y、おなかがすいた」と言う。祖母は、「ママが、ハンバーグ作って待ってるよ！」と話すと、Yは「ばあば、きれい！」と言う。

(考察)

Yは、Rが家に帰ろうとすると急にRに抱き着き、「Y、おなかがすいた」と言う。これは、『もっとあそんでいたい』、『いえにかえりたくない』というYの気持ちの表れを間接的な表現で表している。

J-19

タイトル「いつもね～Y、おうちでおっきいりんごをたべているんだよ。だから、かいたんだよ」

2007年4月1日 (4歳1ヶ月)

(背景)

Yが、Rの家に遊びに来たときにりんごの絵を描く。食卓には、Rとパートナーも一緒に座わりYの描いているりんごの絵を見ている。

(エピソード)

Rのパートナーは、Yの描いているりんごの絵を見ながら「ずいぶん、大きいね～」と言うと、Yはちょっと間違えたかな？という表情を浮かべた後、「いつもね～Y、おうちでおっきいりんごを食べているんだよ。だから、かいたんだよ」と話しを続ける。

(考察)

Yは、頭の中で思い描いているりんごの絵を描いたが、Rのパートナーに「ずいぶん、大

きいね～」と言葉がけされた。Y は、パートナーの言葉がけを聞いて一瞬間違った絵を描いたかな？という思いから少し困った表情を浮かべたが、Y はそこで消極的な方向に向かわず、自分の意思をパートナーに主張する積極的な姿がみられた。

J-20

タイトル 「ガチャガチャやりたい」

2007年4月14日（4歳1ヶ月）

（背景）

最近のY はスーパーなどに置かれているコインゲーム、ガチャガチャに興味を持ち始める。おもちゃが欲しいというよりは、お金を入れてハンドルを回すことに興味を持っていた。そのため、ガチャガチャを見ると近づき、お金を入れなくてもハンドルを回すことが多い。この日もスーパーの入口にガチャガチャが置かれていたので、R はその目の前を通り過ぎようとしたが、Y はそれに気づき、ガチャガチャがやりたいとゲームの前に立ち尽くした。

（エピソード）

R と Y は、目の前にあるスーパーへ買い物に行く。スーパーの入口には、コインを入れてハンドルを回すとおもちゃが出てくるゲームが並んでいる。R は、Y がそのゲームに気づかないように通り過ぎようとする、Y は案の定ゲームの前に立つ。R は、はじめのうちは知らない振りをするがY がR の後ろについて来ないために近寄り、R が「どうしたの？」と尋ねると、Y は何も言わずにゲームをじっと見ている。R は、「Y、行こう」と言うと、Y 「ガチャガチャ、やりたい」と話す。R は「今日は、ゲームをするのをやめよう。行くよ」と言うと、Y の頬が怒って膨らむ。そして、R の顔を見る。R は「だって、ねえね、お金がないから」と話すと、Y は「おみせやさんのおかね」と小さな声で話す。

（考察）

エピソードでは、ガチャガチャをさせたくないR とガチャガチャがしたいY との対立場面である。Y がガチャガチャの前に立つという行為は、R がガチャガチャをすることを好まないことを理解しているからこそ取る行為である。この行為は、ガチャガチャをやりたいという気持ちを間接的に表している。さらに、Y がガチャガチャをしたいことを言葉で表すと、R はスーパーに買い物へ行ったのだからお金を持っているのにもかかわらず、Y にはお金がないから今日はできないことを告げる。Y がR の状況をより理解しているならば、R がお金を持っていないと言ったときに買い物をしに来たのだからお金はあるはずであると推測できるが、Y はそこまでR の状況を理解していない。Y は、R の話を聞いた後、「おみせやさんのおかね」と小さな声で言う。つまり、お店屋さんにお金を借りれば良いことを間接的に提案している。ここでのお金は、Y にとって貨幣としての価値ではなく、ガチャガチャができるためのコインとして考えられている。

J-21

タイトル 「きょうりゅうごっこしよう～」

2007年4月14日（4歳1ヶ月）

（背景）

Yは、Rと恐竜ごっこをしたいが、RがなかなかYと遊ばないと急に怒り出す。その時点では、Rに子どもがいなかったため、YにRの家に住んでも良いことを時々話していた。

（エピソード）

今日は、YがRの家に遊びに来るだけでなく、伯父からピアノのレッスンを受ける日だった。Yは、Rの家に着くとピアノのレッスンの話はしないで恐竜ごっこを始める。

Yは、Rに向かって「きょうりゅうごっこしようといってしなかったら、もうきょうりゅうごっこしようといってもしないからね～」と言いながら、Rに自分の思いを伝えたいという気持ちが表れている。Yは、「ねえねのこときらいになっちゃう。もう、すまないからね～（普段からRがYと一緒に住んで欲しいことを伝えている）」と言うのでRが笑うと、Yは「わらうんじゃない」、「きょうりゅうごっこしようといって」と自分の気持ちを言葉で表出した。

Yがそのような状態の中で、Rはなかなかきょうりゅうごっこをしないと、Yは「1かいできくってさ～、あやまったじゃん、そしたらねえねさ～、またひどいこといったのに～、いっぱいいてんじゃん」、「ねえねが、Y、Y、Yっていうのいやなんだよね～」と目を細める。

Rは、Yがピアノのレッスンの方に気持ちが向かず恐竜ごっこを続けているためYと一緒に恐竜ごっこをすることにした。突然Rが恐竜になって動き出すと、Yは「スリッパをぬいたほうがはやくはしれるよ。こうやって」と言いながらその動きをした。Yは、「いつもは、きしゃごっこやきょうりゅうごっこであそんでくれるのに、きょうはあそんでくれないの？」と真面目な表情をしてRに尋ねる。Rは、「ピアノのレッスンが終わったら、恐竜ごっこをして遊んであげる」と話すとYは嫌がる。

（考察）

はじめYが自分の気持ちを間接的に伝えているが、Rが自分の思いを理解してくれないことから直接的に自分の気持ちを伝えているエピソードである。間接的表現で言っているのは冒頭部分であり、Yは「きょうりゅうごっこしようといってしなかったら、もうきょうりゅうごっこしようといってもしないからね～」という言葉を表出しているが、エピソードの真ん中辺りにくると「きょうりゅうごっこしようといって」というYの直接的な表現がみられる。

J-22

タイトル 「ねえねとあそんであげない」

2007年6月10日（4歳3ヶ月）

（背景）

Yは、最近自分の思いを通そうとする。このエピソードは、その一例である。

（エピソード）

Yは、Rとブロックで遊んでいるときにアイスクリームを欲しがると。Rは、「さっき食べたよね。今日は、おしまい」とYに伝えると、Yは自分の思いが通らないことから泣きまねを始める。ときには、「ねえねとあそんであげない」と言うようなことが多くなってきた。

(考察)

日常生活のなかで、このようなエピソードは多々みられるようになってきた。Yは、「ねえねとあそんであげない」という本心とは反対の思いを相手に伝えている。Yとしては、この言葉を発することからRが自分の要求に応えると想像していたのだろう。Yのなかでは、Rが自分の思う方向に向いてくれる存在であると理解していたからこそ、Yはこのような行動を取ったのだと考えられる。

J-23

タイトル「どんなきもち？」

2007年8月26日(4歳6ヶ月)

(背景)

弟Kが誕生し、家族が一人増えた。Yにとっては、弟ができたのである。しかし、Kが誕生してから少し経つとYが養育者に発する言葉の中に変化が表れた。

(エピソード)

年中組の夏休み、YとRは電車に乗ってディズニーランドへ行く。途中電車の中で、Yは座席に座りながら頭を後ろに倒すと窓枠にドーンという音とともにぶつかった。窓枠にぶつかったYもその音を聞いたRもびっくりして顔を見合わず。Rは、「Y、大丈夫？」と尋ねると、Yは自分でしでかしたことに触れずに「なんて、おもった？」と聞くので、Rは「ドンという音がしたから、Yが痛かったかな？って思ったよ」と答えた。

(考察)

この頃、Yは自分の行動に対して「どんなきもち？」とRや母親などに尋ねるようになった。夏休みに入り、母親と弟Kのかかわりをみることから両親にとっての自分の位置はどこにあるのかということを感じ始めたように思われる。Yの近くに弟Kは存在しないが、家族と過ごすなかで自分の出来事に対して家族がどう考えているのかという意見を聞くことにより家族のなかでの自分の位置を確認しているように思われる。それによって、自分の気持ちを調整している。

J-24

タイトル「恐竜パークに車でお出かけ」

2007年11月5日(4歳8ヶ月)

(背景)

4月に弟Kが誕生し、Yは初めのうちはKの存在を嬉しく感じていたが、Kと生活を共にする中で、今までは自分に何か事が生じたときには両親が全面的にYとかかわっていたが、弟Kの誕生により両親がKとかかわる時間が多くなった。それにより、Yは気持ちの上でKに両親を取られたと感じている時期である。

(エピソード)

2007年10月5日、はじめにYは恐竜のママと赤ちゃんを描きはじめ、Yの家族の絵を描く。初めてYが、家族を描いた絵である。Yの家族は、すべて恐竜で表現されている。Yと両親は恐竜で描かれているが、弟Kは卵から生まれているところを描いている。

2007年11月5日、Yは恐竜パークにお出かけの絵を描く。この夏休みにYの家族は、群馬県にあるサファリパークへ訪れた。Yは、そのときの体験を基に絵を描いている。車をたくさん描き、車にはそれぞれ番号が付いている。1番目の車はYの車、2番目の車はパパの車、3番目の車はママの車である。しかし、弟Kの車は描かず、Kはばあばとお留守番という設定にする。実際、弟KはYと両親とサファリパークへ行っているが、Yは絵に弟Kを描いていないことについてまだ赤ちゃんなので車に乗れないと理由付けをしている。さらに、Yの家族は恐竜のいる世界を車で走っているが、恐竜パークの恐竜たちはお互いに戦っているのに車が通っていることに気づかないと話している。

(考察)

Yは、夏休みに両親と弟Kと4人でサファリパークへ行ったことを基に絵を描いている。そのなかには車の絵を描き、Yと両親の車には番号を付けているが、弟Kの車は描かない。これは、弟への嫉妬を間接的に表現しているのだろう。Yの生活の中でKの存在が失われることはないが、現実の世界ではない空想の世界では自分の思いを表出できる。Yは、絵を通して自分の要求実現を表現していると読み取ることができる。

J-25

タイトル「きこえない、みみがとおくだからね、わからない」

2007年11月18日(日)(4歳8ヶ月)

(背景)

この日、Yは幼稚園がお休みのためRの家に遊びに来た。最近、Yはパソコンに興味を持ち、サファリパークのホームページを開いてクイズをしたり、動物の説明を画面上で読んだり、映像を通して動物が誕生する瞬間を見たりするなど楽しんでいる。Yにとっては、パソコンの画面が見られることも嬉しいが、パソコンを自分で操作できることがとても嬉しいようである。Rが、パソコンを操作しようとする、Yは「Yが、やる。どこをおせばいいの?」と言いながらパソコンの操作に積極的に取り組んでいた。

(エピソード)

YとRは、Rの家の2階の書斎にあるパソコンで遊んでいる。Yが、楽しそうにサファリパークのホームページを見ているときに、RはYに聞こえるように「Yのお部屋があるんだよな～住んでくれるでしょう?」と話すと、Yは黙って黙々とパソコンをしている。Rは、普段からYに住んで欲しいことを伝えている。Y自身も以前父親に怒られると『ねえねのいえにいく』と言って、玄関のドアを開けると門のジャバラを開き家を出て行こうとする行動をとったことがあった。しかしこの日は、RがYの応答が欲しく何度も「Yのお部屋があるんだよな～住んでくれるでしょう?」と尋ねたが、Yは「きこえない」、「みみ

がとおくだからね」、「わかんない」などと応えた。

Yの応えが返ってきたので、RはYの返答に内心喜びを感じながら、Yに向って「(Yの家にある)おもちゃ、運んでくれるんでしょう？」と尋ねると、Yはパソコンをしながらうなずいた。Yの応答を聞いたRは、内心嬉しくなった。RはYに「誰が、おもちゃで遊ぶの？」と尋ねると、Yは「Mちゃん(伯父)とねえねがあそべばいいでしょう」と応えた。Rは、「Yは住んで、一緒におもちゃで遊ばないの？」と尋ねるとYは大きくうなずいた。

(考察)

Rは、Yに向かって家に住んで欲しいことを伝えると、初めのうちは、YがRの言葉に反応せず、パソコンの操作を続けている。Rの質問に対して応答せず黙っているということは、Yが間接的な表現を示している。しかし、RがYに対して家に住んで欲しいことを言い続けるため、Yは「きこえない」、「みみがとおくだからね」、「わかんない」などと言い始めた。この応答は、YがRの質問を聞こえているからこそ発した言葉だろう。Yは、Rの要求を受け入れたくないという気持ちを直接的に伝えるのではなく間接的に伝えている。しかし、最後のRの質問に対してYは限界を感じたのだろう。Yは、Rの質問に対し「ねえねとMちゃんが、あそべばいいでしょう」と話し、Rが「Yが住んで、一緒におもちゃで遊ばないの？」と尋ねるとYは大きくうなずくという行動は、相手の発言に対して同意することを直接的に表している場面である。

J-26

タイトル「3つもおなまえがあるんだから」

2007年11月18日(日)(4歳8ヶ月)

(背景)

YはRの車に乗り、近くにある丸井まで買い物に行った。その帰りにRからお泊まりについての質問があるとYは、以下のように答えた。

(エピソード)

丸井で買物を終えたYとRは、Rの運転する車に乗って祖父母の家に向う。その途中、Rは「Y、ねえねのおうちにお泊まりに来てね」と言うと、Yは「うん」と答える。Rは「いつ来てくれる？」と尋ねると、Yは「ながいおやすみになったら」と言う。Rは「ねえね、楽しみにしているね」と運転しながらニコニコ弾んだ声で話すと、Yは「ねえねとばあばのおうちにとまるの」と言いながら、さらにYは「ばあばのおうちにとまるときはY、ねえねのおうちにとまるときにはS(姓)Y(名)、YのおうちにとまるときにはY(姓)Y(名前)なんだぞ!3つもおなまえがあるんだから」と元気よく話す。

(考察)

Yは、車に乗っているときにリラックスしていることが多い。その状況を理解していたRは、車に乗っているときにお泊りについて話をする。

この時期になると、Yは長いお休みになったら泊まりに行くなど、Yの生活の状況を理

解するようになってきている。Yは、祖母の家、Rの家、自分の家までをお泊りする場所と言いながら、それぞれの家に泊まる時の名前の異なりを調整している。泊まる家によって自分の名前を変えるということは、Yにとっては葛藤であると捉えることができる。Yは、意識しながら自分の名前を変化させ、自己の位置確認を表している姿と捉えることができる。

J-27

タイトル 「ほんもののYはこないよ」

2007年12月9日（日）（4歳9ヶ月）

（背景）

そろそろクリスマスがやってくる季節になり、YとRはクリスマスの話になる。Rが、Yにサンタさんをお願いするプレゼントの話始める。

（エピソード）

Rは、Yとクリスマスの話をしている。Rが、「クリスマスにサンタさんが、Yをプレゼントしてくれるかな？ねえね、Yが入れるような袋を用意しよう～」と言うと、Yは真面目な顔をしながら「ほんもののY？」と尋ねるので、Rは「そう、本物のY」と応えると、Yは「ほんもののYはこないよ」と真剣に話す。Rは「来ない？」と驚いたように尋ねると、Yは「うん」と言う。

（考察）

Yは、Rがサンタさんをお願いするプレゼントが自分であることを知ると驚く。Yが、真面目な顔をしながら「ほんもののY？」と尋ねる姿からは、本物のYがプレゼントされることは在り得ないという事実をRに伝えている。この時期のYは、現実の世界と虚構の世界を理解し始めている。

J-28

タイトル 「きょうりゅうゲームしよう」

2008.2.19（5歳0ヶ月）

（背景）

Yのお誕生日会を祖父母の家で行う。この頃、Yはスーパーなどに置かれている恐竜ゲームをすることを好んだ。この日、RはYと恐竜ゲームごっこを行うが、Yはジャンケンをするときに何度もズルをする。

（エピソード）

Yは、「きょうりゅうゲームしよう」と言う。YとRは、お互いに3頭ずつ恐竜を持つ。ゲームを始めるときには、自分の持っている恐竜の紹介をする。紹介の仕方は、「～ザウルス、～属性」などである。YとRが恐竜を持ちながら戦うとRが勝つこともあったが、Yが勝つ方が多かった。Yは、ジャンケンの時にズルばかりをする。Yの手はグーなのか、パーなのかよくわからない。RがYの様子を見てみると、YはRの様子を見ながらRがパーを出すとYはゆっくりグーの手からチョキに変える。Rは、Yの手を凝視する。Yは、R

が自分の手を見ていることに気づくと、「Y、チョコキをだそうとしていたところ・・・」などと言いつつのように R に話す。

(考察)

Y は、R にジャンケンで負けることが悔しいのだろう。R に負けるという事実を受け止めながら、どのようにしたら R に勝つことができるのかを考えた結果があと出しという方法だった。Y は、R が出す手を見た後に自分の出した手が負けていると分かると、相手に分からないように出した手をゆっくりと変える。Y にとっては、勝つことに意味がある。

R は、Y に向かって「ズルをしているよ」と言葉がけをしているわけではないが、R が Y の手を見ていることに気づくということは、Y も R に対して負い目を感じているのだろう。R が Y に対して何も尋ねていないのにもかかわらず、Y の方から「Y、チョコキをだそうとしていたところ・・・」などと言いつつのように話す。Y は、間接的な方法である言いつつを用いながら R にジャンケンで勝ちたいという姿がみられる。

J-29

タイトル「だいじょうぶだよ。たべたことをいわなければわからないよ」

2008.6.29 (5歳4ヶ月)

(背景)

Y は、R の家から祖父母の家に遊びに向かう途中コンビニに寄る。Y は、コンビニでかき氷を買った。その後、車の中で Y が R に話した内容である。

(エピソード)

Y は、R が運転する車で祖父母の家に向かう途中コンビニに寄る。R が、Y に「何か買ってもいいよ」と話すと、Y は「かきごおりがほしい」と言う。R は、「じゃあ、レジまで持って行って」と言葉がけすると、Y は冷凍庫から一つかき氷を取りレジまで運ぶ。Y は、支払いを済ませ車に乗る。車で実家へ向う途中、Y は「かきごおりがたべられてよかった～ ママがかってくれないから」と話した。R は、「え！じゃあ、半分だけ食べよう」と言うと、Y は「だいじょうぶだよ。たべたことをいわなければわからないよ」と答えた。

(考察)

R は、「だいじょうぶだよ。たべたことをいわなければわからないよ」という Y の発言に驚く。Y にとって R は、自分の要求を叶えてくれる存在だと理解している。この頃になると Y は、相手を騙すようになる。前エピソードでは、ジャンケンに負けたくない Y があと出しという方法を使い相手を騙している。また、本エピソードでは、かき氷を食べたのにもかかわらず母親にはかき氷を食べたことを言わなければ分からないと言葉を用いながら相手を騙している。これらのエピソードは、Y が間接的な表現をしながら自分を正当化しようと理由付けをしている。

J-30

エピソード「でも、リレーでくつがぬげちゃった」

2008年10月12日(日)(5歳7ヶ月)

(背景)

この日は、Y の幼稚園最後の運動会だった。運動会の当日は雨になり、翌日の予備日に行った。年長組の競技は、かけっこ、ダンス、さらに年長組しか行わないクラス対抗のリレーである。Y は、担任よりクラス対抗のリレーのアンカーとしてもう1度走るように言われていた(人数調整のためアンカーとして走る予定だった)。Y の両親、特に父親は、大学まで運動部だったので Y の活躍を楽しみにしていた。しかし、昼食後に行われたクラス対抗リレーでは、Y が一回目に走った時に靴が脱げてしまったのである。

(エピソード)

Y は、クラスの中で足が速く、運動会当日はアンカーとしてもう一度走る予定だった。午前中の競技を終え、お弁当を食べていると Y の友だちである S がやって来る。Y は「S!」と喜び、二人でお菓子を食べていると、S は両親たちに向って「Y は足が一番速いんだよ」と言った。S の言葉を聞いて、Y の両親もリレーを非常に楽しみにしている。

いよいよリレーが始まる。Y は背の順だと真ん中より小さかったので10番目ぐらいに走った。ちょうどバトンを渡され、一つ目のコーナーにさしかかったときに Y の靴が脱げた。R たちは、Y がどのような行動に移るのか心配だったが、Y は再び片足だけ靴を履いたまま走り出した。しかし、Y は2回目にアンカーとして走れず(転んだために担任による示唆でアンカーになれず)、他の友だちがアンカーになったのである。そのとき、Y の両親は非常に残念そうであった。

運動会終了後、Y は一度家族のシートの所へやって来るが、友だちとどこかへ行く。Y の両親が、家に帰ろうと Y を探していると Y は本部席の辺りで年中組の時に担任だった保育者とはしゃいでいた。年中組の担任は、昨年退職したが、Y たちの最終学年の運動会を見に来ていた。

Y は、両親と帰るために車を取りに門を出ようとするが、固定遊具を見つけ遊び、ふざけ始める。その姿を見た弟 K も一緒になってふざけ始めた。両親は、Y と K に「家に帰る」と伝えたが、二人ともふざけたままだったので勢いよく二人を怒った。

祖父母の家に着くと、R は Y にお店へアイスクリームを買いに行こうと提案する。すると Y は喜んだ。お店へ行く途中、Y は R にリレーの話をしてきた。R は、「Y、頑張ったね～」と言うと、Y は「でも、リレーでくつがぬげちゃった」と初めて言葉に表わした。R は、「でも、靴が脱げてもそのまま走ったでしょう。だから S 組さんは、1番になれたよね。もし Y が、靴を取りに戻っていたら皆に追い抜かされちゃったよね。よく頑張ったね～」と話した。

帰宅後、R は母親に Y の気持ちを伝え、運動会のビデオを見るときには、靴が脱げたけれども頑張って走ったよね～という方向に言葉がけをすることにした。ビデオを見始めると、Y は靴が脱げたこと、先生に怒られたことをポツリと話した。

(考察)

Y は、運動会終了後、両親と弟と自宅に帰ろうと門を出ようとした時に固定遊具で遊び、

弟と共にふざけ始める。Y は、リレーの時に走り方が不十分だったために転び、アンカーになれなかった悔しさと両親が Y のアンカーを非常に喜んでいたことを知っていたことに対して負い目を感じている。Y は、その葛藤をふざけることで表している。一方、父親は Y のリレーの出来事を理解しようと思いつつも Y がアンカーとして走れなかった残念な気持ちのやり場をどうしたら良いか分からない気持ちと R と K がふざけている姿を見ての苛立ちが重ね合わさり、いつも以上に強い口調で怒った。

J-31

タイトル「Y は、よわよわチーム」

2008.11.20 (5歳9ヶ月)

(背景)

R が、Y の家に歩いて遊びに行く。そこで、R は Y と母親と 3 人で幼稚園の友だちの話になる。

(エピソード)

R は、Y の家まで歩いて行く。R が、母親とリビングで話をしていると Y が R に近寄り、幼稚園の話始める。Y は、「Y は、よわよわチーム」と言う。その Y の話を聞いた母親は、「Y は、よわよわチームなんだよね。H 君と S 君と 3 人組なんだよね」と話す。母親は、Y の友達関係を細かく理解している。R は、「T 君とは、遊ばないの?」と尋ねると、Y は「T は、なぐるからいやだ。こうやって」とパンチの真似をする。Y は T の真似をした後、「だから、こうやって T をなぐってやる」と Y は再度パンチの真似をする。

(考察)

Y は、クラスの中では静かな友だちと遊ぶことを好んでいる。Y は、そのことを理解しているために「Y は、よわよわチーム」と R に伝える。エピソードの中に出て来る T は、4 月生まれで体も大きく、自分の要求が通らないと暴力をふるようである。Y は、T の性格をよく理解している。R や母親には、T 君に対して「だから、こうやって T をなぐってやる」とパンチする真似をしているが、これは現実の中ではなく、非現実の中で行っている行動である。Y は、現実には T をパンチできないことを理解しているがために R と母親の前でパンチをしているのだろう。

J-32

タイトル「おれ、4 月か 5 月うまれがよかったな〜かっこいいなまえがよかったな〜」

2008.12.19 (5歳10ヶ月)

(背景)

Y は、R の運転する車に乗ってビデオを借りに行く。エピソードは、その車中での話である。

(エピソード)

Y が、R の家に遊びに来る。Y は、R が運転する車に乗ってビデオを借りに行く。その車の中で、Y がふと呟いた。Y は、「おれ、4 月か 5 月うまれがよかったな〜」と話す。R

は「どうして？」と尋ねると、Yは「ゆきがふる2月はいやだ！2月19日はいやだ！だって、4月うまれは、Tみたいにつよいもん！」と話す。さらに、Yは「かっこいいなまえがよかったな～」と言うので、Rは「どうして？」と尋ねると、Yは「RやHみたいにつよいなまえがよかった。Yじゃなくて」と話したのである。Rに自分の気持ちを伝えているYは、やや怒った表情をしながら強い口調で話した。

(考察)

この時期のYは、クラスの友だちの特徴を理解しながら、自分の特徴も把握するようになる。Yは友だちと比較しながら自分の弱さをRに伝えていることから、友だちの強さを認めている年齢であることを理解することができる。以前は、自分の気持ちや要求を直接的に表現できずに間接的な表現を用いているYの姿がみられたが、この頃になると自分の弱さを受け止めながら言葉で相手に伝えることができるようになってきた。

J-33

「いちばんすきなのは・・・じぶん」

2008年12月19日(5歳10ヶ月)

(背景)

Yは、Rの家に遊びに来ると折り紙遊びを始めた。Yは、折り紙でいろいろな物を作ることができるが、この日はその中でも得意なパクパク作りを始めた。一般にパクパク作りを始めた子どもは、自分が興味や関心を持っていることをパクパクに書き記す。Yは『Yは、ママがだいすき』と書き、そこから家族の話が始まり、家族の中で大切な存在を話し始める。

(エピソード)

Yは、Rの家に遊びに来る。ビデオを見た後、折り紙遊びを始める。Yはパクパク(両方の親指と人差し指を入れて動かす)を作り、そこに文字を書いていくのでRは興味を持ってYの姿を見ていた。Yは、パクパクに『Yは、ママがだいすき』と書くと家族の話が始める。

Yは「Yは、ママがすき、ねえねもすきだけど、Yのママだから」と話し、折り紙を折りながら「4ばんめにすきなのは、ぱぱとMちゃん(Rの夫)、3ばんめにすきなのは、ままとねえね、2ばんめにすきなのはK(弟)、1ばんめにすきなのは・・・」と考えているので、Rは「A(Yの従妹)?」と尋ねると、Yは「Aちゃんは、ねえねとおなじ」と答える。Rは、「誰かな?」と言いながらYの様子を見てみると、Yは「じぶん」と言いながら自分を指さした。

(考察)

この頃になるとYは、遊びをする中で1番目に好きな人、2番目に好きな人と話すことはあったが、今回のように家族(祖父母や伯父伯母なども含む)の中で順位をつけ、言葉で発することはなかった。Yは、4番目に好きな人から発表し、特に2番目に好きなのは、弟のKという発言にRは驚いた。Yは、日々弟Kの存在が気になり、Kの誕生から両親が

自分だけに目を向けないことを気にしていた。けれども、順位では弟が 2 位であった。そして R は、1 位は誰なのかと興味を持ちながら Y の発言を待っていると、Y の言葉から出たのは「じぶん」という言葉だった。5 歳ぐらいになると、自分の存在が周りから見るとどのような立ち位置にあるのかということが気になる時期なのだろう。Y は、いちばんすきなのは誰かという葛藤を抱きながら、結論として出たものは『じぶん』だったのである。その葛藤した自分の気持ちを言葉により表現しているのである。

J-34

タイトル 「小枝事件」

2009 年 4 月 11 日 (6 歳 1 ヶ月)

(背景)

R は、午後から実家へ行くと叔母のパートナー N が、庭で車のタイヤを付け替えていた。そこへ、しばらくすると Y と K が父親の車に乗ってやってくる。Y と K は、N を見つけると喜びふざけ始める。弟 K は、N たちとふざけているときに小枝を見つけ振り回し始める。K の姿を見た父親は、K に小枝を持たないように言葉がけする。父親は、N とふざけ合っている子どもたちの様子を注意しながら見守っている。その間 R は家の中に入り、家族のお茶の準備をしていた。そのときに、事件が起きたのである。

(エピソード)

車で実家にやってきた Y と K は、叔母のパートナー N を見つけると家の中に入らず庭で遊び始める。初めは追いかけてごっこのような遊びをしていたが、やがて弟 K が小枝を見つけ、それをもって N を追いかける。父親は、その姿を見て度々注意している。そのうち、K は N を小枝でぶちはじめ、Y のこともぶつようになる。Y は「いたい」と言ったようだが、K は棒を持って走り回ることを面白がる。K の振り回した小枝が Y に当たり Y が「痛い」というと、K はより楽しさを増したような表情をする。

Y は、K に小枝でぶたれる痛さを何度言葉で伝えても止めないため K に怒りをおぼえる。Y は、あまりにも頭にきたようで、K が Y の所へ走ってきた瞬間、Y が足を出すと予想通り K が転び、額から血を流す。Y は、K が自分の足につまずくとは思ったものの、額から血を流すようなことになるとは思っていなかった。その瞬間 Y は驚き、父親に怒られることがまっさきに頭に浮かび上がる。Y は、急いで走って玄関の扉を開け中へ入ると靴を履いたまま顔をふせて泣いた。

それを知らない R は、祖父母と 3 人でリビングにいながらお茶の用意をしていた。R は、玄関のドアが開いた音がしたため誰かが中に入ってきたのかなと確認するように玄関を見た。そこには、靴をはいたまま顔をうずめて泣いている Y の姿があった。R は、Y に近づき様子をうかがおうとすると、N が入ってきて祖父母と R に状況を説明した。N は、「Y も K に小枝でぶたれて本当に痛かったと思う」と話す。

そのうち、父親が K を抱いて入ってくるなり Y を怒鳴る。父親は、そのまま K を抱えリビングへ行く。K の額が切れたので、祖母が K の額の処置をした。その後、父親が Y の所

へやってくる。父親は、「一度注意をしたら聞けよ」と話す。その間、Yは顔をうずめたままである。Rは勇気を出して、「何度も同じことを繰り返すのが子どもじゃあない？」と話した。父親は、「ここだけを見ているとみんなはYがかわいそうに思えるかもしれないけど、一日中この繰り返しなんだから。今日も何度注意したか。みんなは、Yを甘やかすすぎるよ」と話す。祖母は、「子どもを育てるのは、本当に大変よ。ただ、怒りすぎてYが変になっちゃったらもっと大変でしょう」と言う。

その後、父親がYを抱き上げる。Yは、シクシク泣いていた。父親は、Yと洗面所に行き顔を洗い、その後父親は先ほどの件についてYに話した。二人がなかなかリビングに戻って来ないため、祖父が洗面所に行く。二人の姿を見た祖父は、「もう、(Yに言うのは)止めろ」と一言だけ言うとリビングに戻って来た。その間、祖母はお菓子を用意し「このお菓子、おいしそうよ」とテーブルに置く。Kは、お菓子を見るとニコニコし、お菓子を食べ始める。その時、Yは父親とリビングにやってくるが今度はソファに顔をうずめて泣いている。少ししてから祖母が、「Y君、お菓子食べない。このお菓子、おいしそうよ」と言うと、泣いて目が少しはれぼったい顔を見せた。祖母が「ほら」と言うと、Yは元気なさそうにお菓子を食べる。Yは、時間が経つうちにいつものYの表情に戻ってきた。

一方、父親はソファに座ったままムツとしていた。おそらく、大家族の中で起こった問題だけあって、自分の意見だけが通らなかったことが父親の気持ちをイライラさせたのだろう。父親は、自分の気持ちを落ち着かせようと必死だった。祖母が、父親にお菓子を薦めても食わずに子どもたちの様子を見たり外を眺めていた。その間、YとKは出されたお菓子を全部食べた。同時に、Yの表情もいつもの表情に戻った。しばらくすると父親は、「帰ろう」とYとKに言葉がけし、二人は父親が運転する車で自宅へ戻った。

(考察)

このエピソードの事の発端は、弟Kが小枝を見つけ振り回したことにある。Kは、小枝を振り回す楽しさや振り回した小枝が周りの者に当たり「いたい」という言葉を聞く面白さから小枝を振り回し続ける。Yは、Kの振り回す小枝が自分の体に当たり本当に痛かったのである。YはKに痛いことを伝えるがKが遊びを止めないために足を出し、Kを転ばせようと考えたのである。Yの予想通りKはYの足にひっかかったが、Kが額を切り血を流したことは予想外だったのだろう。

この瞬間のYは、Kが額を切った驚きと同時に父親に怒られるという怖さが生じたのである。Yは玄関に入り、靴を履いたまま顔を伏せている。Yの行動から読み取れることは、この場合には泣くしかなかったのである。Yが、父親に理由を言えば言うほど、目の前の事実としてはKが怪我をしたことを話され、怪我をさせたYの方が悪くなる。ここでの泣きは、問題解決をするためには合理的な泣きだったのかもしれない。パニック状態になったYが、問題解決するには泣くしかなかったのである。Yの行動から泣きにも二つのレベルがあることが分かった。年齢が低い場合の泣きは、自分の悔しさを表すための表現方法であるが、年齢が高い場合の泣きは、自分の思いを相手に言葉で伝えることができずに

どのように表現してよいのか分からないとき取る行動であることを理解することができた。

J-35

タイトル「トイザラスへもっていけばいいんじゃない？」

2009年5月31日（6歳3か月）

（背景）

Yが、テーブルの上でKのミニカーを走らせた途端、ミニカーが床に落ち壊れる。Yは、Kのミニカーが壊れたため一生懸命直そうとする。しかし、なかなかミニカーは直らない。

（エピソード）

Yは、センターテーブルの上でKのミニカーを走らせると、そのまま床に落ちて壊れる。その状況を見たKもYもがっかりする。Kは「Kの車」と騒ぐ。Yは、「Kちゃん、Yがなおしてあげるからね」と言いながら一生懸命なおしているが、なかなか上手くいかない。Rは、「Y、ねえねもやってみる」と言ったものの直せない。するとYは突然、「トイザラスへもっていけばいいんじゃない？」と提案する。Rが「トイザラスで直してくれるかな？」と尋ねると、Yは「トイザラスのひとが、（車を）つくったんだから。はやくトイザラスにもっていこう」と話す。

Yの意見を聞き、RはYとKを車に乗せトイザラスへ向かう。Yは、車の中でRに「DSかって」と言う。Rは「今日は、車を直しに行くだけ」と話す。Yは少しふてくされた様子であったが、Rは知らないふりをして車でトイザラスへ向った。

トイザラスへ到着すると、サービスカウンターにいる係の人が、丁寧に車をなおしてくれた。その矢先にYは、「おもちゃをかって」と言う。Rは「今日は、おもちゃは買わないよ。Kの車を直しに来たんだから」と言うと、Yは「おもちゃが、ほしい」とRを引っ張って行く。しかし、Yはなかなかおもちゃが見つからない。Kには、Rが「これを買おう」と粘土を渡すとKは喜んで手に持ち歩いていたが、Yが車を欲しがるとKも粘土ではなく車が欲しいと車のおもちゃを手取る。Rは、慌てて粘土をもとの場所に戻す。Rは、Yの欲しいおもちゃがあまりにも大きいため、YとKには買っても良いが、二人で仲良く遊ぶという約束をして車を購入した。Rは、「Y、ねえねがおもちゃを持つ（箱が大きい）」と話すと、Yは「Yがもつからいいの」と答える。

（考察）

Yの提案した「トイザラスへもっていけばいいんじゃない？」という言葉には、二つの意味が含まれている。一つは、YがKのミニカーで遊び壊したことからトイザラスで修理をしてもらおうという提案であり、もう一つは、トイザラスでRにおもちゃを買ってもらおうという提案である。Yの本当の意図は、後者の提案のように思われる。

J-36

タイトル「初めての面接」

2009.7.15（6歳4ヶ月）

(背景)

Y は、小学生になって初めての面接がある。母親が、面接へ行くと担任から Y の様子を知らされる。母親は、予想もしていなかった Y の生活状況を聞き驚く。父親は、母親から良い報告が聞けることを楽しみにしていた。しかし、母親からの報告を受け、父親も驚いた。

(エピソード)

面接当日、母親は緊張しながらも期待を膨らませて面接に望んだ。母親は、笑顔を浮かべ教室の中へ入る。しかし、担任はなかなか言葉を発さない。少しすると担任は、「どうしようかな～」と少し困った様子で話し始めた。以下、担任からの話の内容である。(1) 全ての授業において落ち着きがない。各教科の先生から落ち着きがないという報告を受けたそうである。特に4～5月は良かったが、6月頃から落ち着きがなくなってきたそうである。

(2) 2月生まれなのに言い訳が多く子どもらしくない。(3) プライドが高く素直になれない。例えば、授業で分かったかどうかを確認すると、Y は分かっていなくても分かったふりをするそうである。担任が再度確認をするために実際尋ねると、Y は分からないそうである。(4) 友達関係でも弱い友だちを数名引き連れて自分がリーダーになる。(5) 図工などの時間に作業が終わっていない友だちの手伝いをする。友だちの作業を手伝うことは、とても良いことではあるが、友だちには遅いから自分が手伝っているのだということを話すそうである。手伝うのであれば、もっと自然に手伝ってほしいとのことだった。

このような報告を受けた母親は、だんだん笑顔から顔がこわばり真顔になる。母親は、担任からの報告を聞いてあまりにもショックだったため、「今よく言われている〇〇発達中の多動でしょうか？」と尋ねた。担任は、母親の質問に対して「イヤ、そうではありません」と答える。

帰宅した後、母親が父親に担任からの話を報告する。父親もかなりショックを受けた。その後、父親は Y と K を乗せ父方の祖父母の家に遊びに行く。少しすると、父親の車で祖母、Y、K は従姉の A を保育園まで迎えに行く。A のお迎え後、A、K、祖母が後ろに座ると Y も「後ろに座りたい」と話す。すると父親は、「前に座ってろって言っただろう。なんで、おまえはわかんないんだ～」と Y に注意した。

(考察) 父親は、Y の面接が期待していた報告以上に悪く、気持ち的にも少し不安定になっていたのだろう。そのため、従妹の A を迎えに行った際に後部座席に座りたいという強い口調で怒る。父親が普段の状態であれば、「後部座席に子どもたち3人で座ることはできないから Y は前に座ってて」などと言葉がけしただろう。Y は、父親のイライラの原因は分からないが、いつもの父親の状態とは異なっていることだけは理解している。だからこそ、Y は父親に対して「A や K といっしょにすわりたい」と言うような言葉を返すようなことはしていない。

J-37

タイトル 「ねえね、ふうせんガムってなあに？」

2009年7月15日（水）（6歳4ヶ月）

（背景）

この日は、Yが午前授業だったので、RとRのパートナーがYを誘ってお昼を食べに行く。昼食後、買物をするとYがガムを欲しがった。そのガムは風船ガムだった。自宅に戻る途中、Yは車の中で風船ガムを膨らませたがる。

（エピソード）

RとRのパートナーは、午前授業だったYを誘って車でお昼を食べに行く。昼食後、各フロアを3人で歩いていると、Yが駄菓子屋さんに寄りたいと話す。駄菓子屋さんでは、小さなカゴをもって10円、20円のお菓子をそのカゴの中に入れていく。お菓子の種類を見てもみると、普段家では買ってもらえないガムをいくつかカゴの中に入れていた。

買物を終え、RのパートナーがYの家に向かって車を運転する。Yは、その車中の中で先ほど買ったガムを食べたいと話す。Rは、Yにガムを渡しながら風船ガムであることを知らせる。Yは、「ねえね、ふうせんガムってなあに？」と尋ねる。Rは、ガムで風船を作ることができるかと話す。Yは、「やってみて」と大事そうにガムを一つRに渡す。Rは、「粒が小さいからなかなか風船ができないかな～」と言うと、Yはさらに大切なガムをいく粒かRに渡した。Rが、風船を膨らませるとYは笑顔を浮かべる。Yは、真剣な表情をしながらRの口の動きを見ている。その後、Yもガムを口に入れた。

一方で車を汚されたくないパートナーは、「Y、汚すなよ。」と言いながらおそろおそろ車を運転していると、Yの自宅近くに来たときに運悪くYの口からガムが飛び出す。その瞬間Yがにやりと笑ったため、パートナーはYを注意する。すると、YはRの膝に顔をうずめて泣いた。Rは、パートナーにYがわざとした行為ではなく偶然口からガムが出たこと、Yにはわざとではなくても車を汚してしまったのだから「ごめんね」と言うことを伝えた。帰宅すると、パートナーの方から先に「Y、ごめんね」と言い、Yもパートナーに「ごめんね」と言った。

（考察）

問題の契機は、Yが膨らませていたガムが失敗により口から飛び出したことである。そのときにYが、伯父に対して「ごめんね」とすぐに言えば車を大切に扱っている伯父の態度も違っていたのかもしれない。しかし、Yは風船ガムが口から出た瞬間にニヤリと笑った。Yにとっては、笑うことで伯父が自分の失敗を許してくれるのではないだろうかと考えていたのかもしれない。けれども、伯父はYの取った行動を見ることにより怒りを膨らませた。結果、Yの笑いは失敗に終わる。その後、Yは泣く。Yは、笑うことで失敗を許してもらえないかもしれないと思い取った行動が失敗に終わったため、泣くしかなかったのだろう。Yは、伯父に向かってわざとガムを口から飛ばした訳ではないと言えば言うほど自分の失敗が強調される。Yが、伯父の車を汚したことは事実なのである。J-39にもあったように、この時期の泣きは3歳頃の泣きとは異なり、自分の言葉で説明できないときにどうしてよいか分からず取る泣きなのである。

タイトル「Y、もうひとつおとまりしたい」

2009年8月24日（6歳6ヶ月）

（背景）

この日は、YとKが初めて二人でRの家に泊りに来る。二人は、リュックサックを背負いニコニコしながらRの家へやって来た。一日目は無事に終わり、二日目になるとYが「Y、もうひとつおとまりしたい」と言い始める。弟Kは、もう一つ泊まりしたいという気持ちを泣きながら示した。Rが両親に連絡すると、今回は1つだけねえねの家にお泊まりするという約束なので、二人を家まで送ってきてほしいということだった。

（エピソード）

YとKは、朝起きると二階の寝室から一階のリビングに降りて来る。Yは、リビングにいるRに向かって「Y、もうひとつおとまりがしたい」と話す。Yの言葉を聞いたKも「Kも」と言う。Rとパートナーは、YとKの言葉を聞いて笑った。その後、近くまで買物に行く車中のなかでも、帰りの車の中でYは「Y、もうひとつおとまりしたい」と話す。Rは、「じゃあ、ママに電話をして聞いてみよう」と言うと、Yは「きいてみて」と答える。

帰宅後、Rがお昼の準備をしているとYは、「はやくママにきいてみて」と言う。昼食後、Rは母親にメールを送った。しかし、なかなか返事が返ってこない。しばらくすると、母親から連絡があった。母親からのメールの内容は、お泊まりは1泊だということなので今回はそうしてほしい。私（R）が、急に仕事があると伝えてほしいということであった。もしYが話を聞かないようならば、私（母親）が電話でYに話すということだった。Rは、母親に一度自分からYに話をすると伝えた。

Rは、「Y、ねえね（私）、明日朝早くお仕事へ行かなきゃいけないんだ～さっき、電話があったでしょう（本当に仕事関係の人から連絡がくる）」、Yは「いやだ～、きょうは、おとまりする。おしごと、やすんで」と泣きながら話す。Yは大泣きする。その日は快晴で家中の窓を開けていた。Yの泣き声を聞いた周りの人は、RがYを虐待していると思われるてはいないかと心配になった。

Rは、もう一度Yの自宅に電話をかけると、母親が出た後に父親が出る。父親の内容は、以下の通りであった。子どもたちには、お泊まりは一泊だと話し、私のパートナーにも連泊するのは悪い。私が子どもたちにお泊まりをしても良いと言え、子どもたちはお泊まりをすると答えるだろう。Yの両親から子どもたちに話すと、結局Yは「ママきらい、パパきらい、かえれ」などと言うことが想像できる。その言葉を聞いた親は、Yをせめてしまうことになる。そのためにもRには、仕事があるからと言ってほしいという内容の話であった。最後にRが、父親に「Yと電話を変わろうか？」と尋ねると、父親は少し怒った口調で「いいよ」と言う。

再度RがYに話をすると、「いやだ。おとまりしたい。ねえね、おとまりしたい。きょうおとまりしたら、あしたのあさおきてすぐにYのいえにかえるから」と泣きながら話す。

しばらくこの状態が続いた。その後、YとKは2階の寝室でぬいぐるみ遊びが始まる。Kが「のどがかわいた」と言うと、Yも「Yものどがかわいた」と話す。3人でリビングへ行く。Yは「おとまりしたい」と話すので、Rは「もう一度メールをしてみるからね。泣かないの」と話す。Yはうなずいた。Rは、今度は父親にメールを送ったが返事はすぐに戻ってこなかった。

その後、リビングで麦茶を飲み、自由画帳に絵を描く。Yは、いろいろと描きながら絵の説明をする。すると、Yは「Y、ばあばのうちに行って、かえりにクレーンゲームをしたらおとまりしないでかえる」と話す。Rは、Yが急にこのような発言をしたのでびっくりした。時間的にゲームを先に行ったほうが良かったので、RはYとKを連れて近くにあるゲームコーナーまで行く（二人とも初めて行った。Rはゲームについて右も左も分からなかった）。ゲームは、それぞれ2回ずつ行った。それから、祖父母の家で夕食を食べて帰宅する。Rが、YとKを連れてゲームコーナーへ連れて行ったり、祖父母の家にいる間に父親からメールが入っていた。内容は、今は二人にいろいろと教える時期なので送って来てくださいという内容だった。YとKは、祖父母の家でもごっこ遊びを楽しむ。YとKは、遊びを続けていたかったようであるが、Kが眠くなってきたのでRの運転でYとKを家まで送った。

(考察)

エピソードは非常に長いですが、Yの気持ちの経過を理解することができる。Yは、自分の要求を叶えることができるR宅にいたいのだろう。自分の気持ちを両親に伝えられないYは、Rに伝えるように話す。Yは、Rと両親のやりとりを聞くことでY宅に泊まらないが、その代わりにクレーンゲームがしたいとRに要求する。

Rは、Yのもう一つ泊まりたいという要求に対してすぐに否定するのではなく、Yの気持ちを受け止めている。その間にYは、もう一泊することは両親との約束を破ることであると再認識したのだろう。

この時期のYにとっては、状況を把握することはできるが、Rに言えば自分の要求が通るかもしれないと考えたのだろう。しかし、Yは要求が通せないと分かったとき、試行錯誤しながら“間”を取り、自分の要求と相手の要求に折り合いをつけている。

J-39

タイトル「そう、Pが1ばんでオレが2番」

2009年10月9日（Yは6歳7ヶ月）

(背景)

Yの運動会の日、弟Kは祖母の家で留守番をしていた。インフルエンザが流行しているため、Kがインフルエンザに罹らないようにという理由からである。運動会后、祖父母宅でYと父親は徒競走について話す。

(エピソード)

Yの運動会の日、弟Kはインフルエンザに罹らないようにという予防から祖母と二人で

留守番をしていた。K は、1 歳の時に痙攣を起こし入院したこともあるため両親も特に K については病気に敏感であった。

R は、午後から K の様子を見に実家へ行く。K は、祖母と静かに遊んでいた。間もなく、Y が両親と祖父母宅に帰って来る。帰宅後、皆でお茶を飲んでいると、父親は「今日、Y、2 番だったんだよ（徒競走）」と爽やかな表情で話す。父親の言葉を聞いた Y は、「そう、P が 1 番でオレが 2 番」、母親は「私は、ビデオを撮っていたからまったくわからないけど」と応えた。父親は、「ちょうど（ゴールの所に）順位をつける人が入って来て見えなかったよな」と言う。Y は、「そう、オレがさいしょ 1 番だったけど、さいごのさいごに P にぬかれた。これぐらいで」とお腹を突き出す真似をする。Y は、「だからおにいさんがまちがえてオレが 1 位だとおもってきたの」と話した。父親は、「そうだよな。それで審判の先生が、この子が 1 位でこの子が 2 位だよって教えていたもんな」と言うと、Y は「そうそう。P は、オレのなかよしのともだち」と話す。

（考察）

Y は徒競走で 2 位ではあったが、仲良しの P 君が 1 位であることを喜んでいる。Y は、「そうそう。P は、オレのなかよしのともだち」と言葉で父親に伝えた。この Y の言葉から Y が、相手を受け入れていることが分かる。一方、父親の方も Y の運動会のリレーのような苛立ちはなく、Y の事実を受け止めながら他の子どもの良さも認めている。何よりも父親が、我が子のありのままを受け止めることができたということは、父親も子どもを育てながら成長していることを理解することができる。